

CAAの機関誌である『CAA Journal』にJANとの協力関係10周年に関する記事が掲載されました。記事はCAAとCAC、両方のエグゼクティブ・ディレクターを務めるIan Tomm氏によるもので、氏は過去2回、Training School Level 1の講師として来日しています(2011年9月)。

Ten years under the rising sun

今年、もう一つ重要な周年記念を祝う

日本との協力関係10周年

Ian Tomm (CAA/CAC Executive Director)

2011年はCAA (Canadian Avalanche Association)の30周年記念と同時に、私たちの仲間であるもう一つの団体にとっても、重要な道標が刻まれた年である。今年、CAAがパートナーシップを結んでいる日本雪崩ネットワーク (JAN)の10周年に当たる。CAAが日本で取り組んできたことは、過去の『CAA Journal』の中でも幅広く紹介されてきたが、10年前に日本で何がスタートし、現在、彼らが何をしているのかについて、少数のメンバーしか認識していないと思う。彼らの歩みは堅実で、CAAのモデルを元に築いてきた基盤は、今では日本独自のものとして存在する。JANは我々のメンバーであり、理事長である出川あずさによって、多くの困難な仕事を成功させ、今後の成長へと準備も整っている。



2010-11シーズンの日本は、鳥取県にある奥大山スキー場で、4人のスキーパトローラーが雪崩に巻き込まれ、死亡する事故で始まった。これは短時間で60cmもの降雪*1があり、スキー場で雪崩が発生したことによる。4人が雪崩現場の確認に行った際、二次雪崩に遭遇した。4人はビーコンを装着していなかった。

この事故は、JANが直面する雪崩安全の課題を浮き彫りにしている。多くの死亡事故にはパターンがある。基礎的な雪崩ウェアネスの不足であり、適切な安全装備の欠如である。そして今

回の事故のように、それはプロフェッショナルの現場でも起きている。とはいえ、この悩ましいパターンは、JAN の成長とこの国で訓練を受けた人たちや講師などによって改善されていくだろう。

*1 : 近隣アメダスデータで 53cm (5時間)

2001 年以來、JAN は CAA のプロフェッショナル・スタンダードを、多くの受講生に教えてきた。これに合わせて、彼らは情報共有のネットワークを構築した。これは雪の基本的な情報である雪崩、気象、地形などをネット上で共有する“雪の掲示板”(Info EX*2 とほぼ同様)と、“SPIN”と呼ばれる積雪の断面観察記録をグラフ化し、閲覧できる JAN 独自のシステムである。

この両サイトの情報は、一般の人も閲覧が可能だが、JAN でトレーニングを積んだメンバーによってデータの更新が行われている。この情報共有ネットワークは、過去数年をかけて充実してきており、この冬から始まる日本で初となる標準化された一般向き雪崩情報のバックボーンとなるだろう。

*2 : *Information Exchange* の略。CAA メンバーが関わる雪崩関連データの共有システム。

これらはカナダで起きたパラダイムの日本バージョンである。つまり、標準化されたガイドラインを用意し、トレーニングによって標準化されたものの適切な理解と適応を促し、メンバーシップによる観測者のネットワークの構築し、ウェブをハブとして情報のデータベースを構築する、などである。(JAN は CAA OGRS*3 を使用しており、レベル 1 や 2 を毎年開催している)

*3 : *OGRS* (気象・積雪・雪崩の観察と記録のガイドライン)

JAN は“雪の掲示板”をデータと雪崩危険度情報の発信場所へと変化させようとしており、それと同時に、プロフェッショナルに対する能力開発のリソース基地にもしようとしている。この構想は、雪崩情報とそれに関連する項目を定期的に更新するためでもある。これは、CAA のメンバーにとって、JAN に貢献する良い機会でもある。たとえば「スキーガイドの 1 日」とか「カナダのスキー場における雪崩予測」といった部分で、JAN メンバーや“雪の掲示板”をよく利用している一般ユーザーにも非常に興味深いものになるのではないかと思う。CAA メンバーの中でこうした支援活動に興味を持った方は、連絡を下さい。私が JAN との架け橋を請け負います。

2004 年、私は雪崩のベテラン John Buffery と共に日本でレベル 1 を教えた。それは日本を訪れた他の ITP 講師*4 が経験したのと同様、とても衝撃的な経験だった。そして 2011 シーズン、私は再び、日本で教える機会を得た。今回は教えるだけでなく、CAA と JAN が緊密な連携関係を続けて 10 周年であることを、出川や JAN メンバーと祝うことも楽しみであった。

*4 : *ITP : Industry Training Program*。JAN の *Training School* に相当。

最初の日本訪問の時と比べると、今回の受講生はより専門性の高い人が多いと感じられた。それはカナダでレベル 1 受講生の意識が進化してきたのと何も変わらない。彼らは山岳ガイドであったり、スキーパトローラーであったり、教育者、プロのアスリート(スノーボード・アジア・チャンピオンが受講生にいた)などであった。

2004年で記憶に残るのは、受講生は皆、私が今まで教えた中でも最もひたむきに学んでいることだった。2011年でもそれは変わらなかった。そのような受講生と日本アルプスに行けたこと、皆が雪崩の用語を学ぶことに熱心だったこと、そして将来、それらの言葉が日本語として受け入れられることを考えると、私は幸せな気持ちになった。

通訳を介して教えることは、ある意味難しく、気力体力を消耗するもので、他にはないユニークな経験である。雪崩用語がまさにそれで、たとえば「fracture character (破断の特徴)」「sudden planar (サドン・プレナー)」をはじめ、その他いくつかの用語は、日本語への直訳がないのである。それゆえ20秒の話が通訳を通すと、文脈を構成し、用語の意味を日本語で説明するため、最後まで辿り着くのに2分ぐらい費やすこともある。

通訳を通して講義することは、忍耐のいる学術的なスキルである。特に林智加子、五月女行徳、出川あずさ、廣田勇介には、私の滞在期間中、多くの難しい通訳をして頂いたので、この場で感謝を伝えたい。

廣田勇介は2004年の講習時は通訳の一人だった。その後、彼は活動の場をカナダに移し、BC州Nelsonの近くにあるBaldface Lodgeにて6シーズン仕事に従事した。彼はそこで雪崩に関する優秀なガイドチームや指導者から、いろいろなことを学んだ。そして2010年、彼はCAAレベル2をカナダで無事取得することができた。

今回、その廣田勇介は、私の日本での講師仲間であった。また、五月女行徳も同じ講師仲間、彼は2004年からレベル1の講師を務め、ニュージーランドでトレーニングを積んだスキーガイドであり雪崩従事者である。廣田は、講習期間を通して常に私と行動を共にしつつ、とても深い観察を行っていた。彼が捉えていたのは、標準化された雪崩トレーニングの価値は、ある国のみにあるのではなく、他国間でも共通するというものだ。「雪崩に従事する仕事の最も素晴らしい点は、シンボルを知れば、みんなが会話できる」。

日本でより高度な雪崩予測や意志決定スキルを磨いていく際の大きな課題の一つが、強く均一性のある積雪である。知っての通り、いろいろな気候帯で活動し、観察すること、そして多様な積雪状況や雪崩の特徴、行動様式を関連させながら経験を積むことは、とても重要である。本質的に安定している積雪の中だけで学ぶのは難しい。

しかし、JANメンバーはカナダをはじめ、その他の国々に積極的に出かけて経験を積み、その学んだことを日本に持ち帰っている。五月女や廣田はその良い例である。結果として昨年、廣田とJANメンバーで講習通訳の経験もある松本省二は、北海道に「天狗スノーキャットツアー」をオープンさせた。最初のシーズンからうまくやっているようだし、今後の活動が楽しみである。

また廣田は、この冬、カナダで行われるACMGアシスタント・スキーガイド資格試験に向けて一生懸命に準備している。これらの話は、今、日本で何が起きているかを知るための一例に過ぎない。このように雪崩の訓練と知識の成熟を計り、カナダの専門的な技術や知識、一般向けあるいはプロ対象の雪崩教育の方法、安全プログラム、今日の機械化されたガイディング*5も受け入れられている。天狗スノーキャットチームの幸運を祈ると共に、近い将来、私もここを訪れたい。

*5:ヘリなど使用したガイド・オペレーションを *mechanized guiding* と呼ぶ。

過去 10 年を振り返ると、多方面から JAN を支援してきた CAA 会長の Bill Mark、エグゼクティブ・ディレクターの Clair Israelsen、そして出川あずさによって、2001 年の時点で初期作業が終了していたのは明らかである。レベル 1 プログラムの成功、現在、要件を満たしつつあるレベル 2 プログラムは、カナダスタイルのプロフェッショナル雪崩リスクマネジメントのシステムと展望に関心が深まっているからと言えるだろう。出川あずさを含む JAN メンバーのこれまでの努力を称えたい。日本の雪崩安全を改善することへの献身さがなかったのなら、この 10 年での発展はなかったかもしれないからだ。

では、次の 10 年で日本はどうなるだろう？ 自分達の歴史を振り返ってみると、CAA のプログラムが本格的に稼働するまで、必死に準備して 10 年掛かっている。CAA が 90 年代初期に経験したのと同じ局面なのが、今の JAN なのだろうか？ また JAN は今後、成長する 10 年を見据えているのか？ 答えは時間だけが教えてくれるかも知れない。しかし確実に言えることは、CAA と JAN の関係は強固で、これからもさらに発展していくのみということだ。次の 10 年は過去の成功をより発展させ、JAN が行う一般向きの雪崩情報や注意喚起、トレーニングやアウェアネスのプログラム改善に焦点が移ることになるだろう。

実際のところ、私たちは the rising sun の次の 10 年を楽しみにしている。